

## 第8部会

分」とは連動しているとも考えられるからである。例えば「五悪段」に出る、「當曼仏世、堅持經道、無敢遺失」という一文は、「流通分」に存在する「若曹當堅持之、無得為妄増減是經法」という一文と、同趣旨であり、両者共に經道、經法を堅持することを勧めている。これは、「五悪段」と「流通分」の底辺に流れる主題が同じであることを示す証左の一つである。

更にいえば「五悪段」全体が「流通分」の伏線的叙述であるとも考えられる。すなわち「五悪段」において、内省的に悪や苦が説かれた直後に、「流通分」で救済が説かれて締め括られるというのは、一般的な大乘經典撰述の手法に一致すると考えられるのである。

これらを考慮するならば「五悪段」は『大阿弥陀經』の構成上、異質な存在ではなく、一貫した主題のもとに著述されたものということになる。では支謙の関与が明確であるにも関わらず、こうした一面が見られるという矛盾をどのように説明すれば良いのだろうか。ここからは試論の域を出ないが、恐らく「五悪段」の原型が原本にあったのだろう。そしてその箇所には何らかの危機を意識せしめる思想が説かれており、眼前の痛ましい現実を直視した支謙によって、「五悪段」は危機思想が濃厚な一段に再構築されたのである。或はその原型とは「五戒」に関連するものだったかもしれない。そうすると「支謙伝」にある「更練五戒」という伝承に対しても得心がいく。なお、その場合、「練」の目的語は戒律の「五戒」そのものではなく、『大阿弥陀經』の「五戒」に関連する箇所（「三輩段」と「三毒段」の中間部と特定）となろう。この説が正しいと仮定

するならば、支謙が大乘經典撰述者達の苦難の記述をもとにして、内的に深化させた可能性すらも出てくるが、拙論が試論に留まる以上は、これを以って擱筆とせざるを得ない。

### 一条兼良『勸修念仏記』とその時代

龍口 恭子

一条兼良（一四〇二—一四八一）は室町時代を代表する知識人であり、その著作は文学・歴史・宗教・有職など、あらゆる分野に亘る。

この希有の文化人はまた仏教に深く帰依し、七十二歳の時に出家し、法名を覺恵といった。出家の十年前に『勸修念仏記』を著している。この『勸修念仏記』は宗派仏教の研究が中心の従来の仏教学の研究分野からは取り残された形で、二、三の論究にとどまる。それは宗祖・列祖、あるいは名僧・高僧の著作でないために、研究対象とみなされなかったのであろうし、また仏教においての室町期という時代性にもよるであろう。

しかし文人によって書かれた優れた仏教書を持つ日本の伝統があり、また室町時代は平安、鎌倉時代という独創的な仏教思想を生んだ時代ではなかったものの、上下を問わず、仏教信仰が盛んに行われ、且つその実態は詳しく記録されている。

本論ではこの『勸修念仏記』の思想を概観し、これを生んだ室町中期という時代との関係について考察して行く。

## 一 治世者の仏道

兼良はその著『樵談治要』の中に、「それ仏法王法二なく、内典外典又一致也」と述べ、仏法と王法、内典と外典が同じ比重を持たねばならないとしている。殊に治世を司る者は天皇・將軍いずれも、まず「仁徳の行を先にし給え」とし、仏法を奉ずることを尊しとしながらも、座禪工夫に暇なきこと、称名安心に浸ることを固く戒めている。

## 二 往生伝の宣揚

本書に特徴的なことは、往生伝を重んじていることである。人の悟りと救いは、往生によつて証明される。往生の相を示し、その往生に至るまでの行業を記したのが「往生伝」であるが、この「往生伝」を兼良は仏典と並んで重要な典籍と位置づけている。念仏の行を勧める本書は念仏修行の証として、確かな往生人の行業を示す。本書下巻において前半は禅僧の念仏について論じ、後半には浄土教の相承を伝え、続けて往生伝をあげる。兼良が往生伝を重要視するのは、在家信者の関わりが多いこと、また往古の文人達に往生伝の編が多く、自身が篤信者である兼良は、これらの往生人の中に、仏教者の理想的なあり方を見出したと考えられる。

## 三 浄土教の系譜

兼良の祖には、月輪兼実、九条道家等、浄土教の篤い庇護者がある。また教義的にいえば、曇鸞・善導・法然、さらに鎮西・西山と次第する浄土宗の流れである。本書上下二巻の内、上巻は念仏受持の十種の勝利をあげるのを始め、月蓋長者譚など念仏の功德を称揚する。全巻の終わりに二河白道の譬えを長

文に亘つて引用し、西方願生を勧めるのである。

## 四 禅浄一致

下巻では、「二代の聖教をくくるに、すべて三身四土にすぎず」とし、浄土の説明、都率浄土と西方浄土の違い、諸仏の阿弥陀仏称讃を述べる。これらは簡潔で要を得たものであるが、もう一つ特徴的なものに、禅との関連がある。本書では、中国禅家の思想をあげる。隋・唐・宋の禅宗僧侶のうち、浄土教に深く帰依した人々をあげ、「禅も浄土も一心のうへのしばらくの法儀也。禅の中にも浄土あり、浄土の中にも禅あり、さらに心をはなれたる法なしと心得べし。」として、禅浄一致を説くのである。

戦乱の室町時代に生きて仏道を求めた一条兼良の著作の中に、以上のような要素を読み取る時、室町時代人が持ち得た方向性ともいふべきものが見えて来るのではないだろうか。

## 現代社会と浄土思想

五十嵐 隆 幸

一 はじめに 仏教思想の実践道の大綱として戒・定・慧の三学がある。これは証を得ようとする衆生の修学で戒―定―慧として順次に配列されている。また教・行・証の体系は仏が説いた教え、その教えに従つて衆生が努める修行、その行によつてさとりを証という。